日本現代文學全集 106

現代名作選(二)

日本現代文學全集 106

現代名作選(二)

講談社

日本現代文學全集
106
現代名作選(二)

編集
伊藤整
龜井勝一郎
中村光夫
平野謙
山本健吉

初版 第1刷
昭和44年6月19日
增補改訂版 第1刷
昭和55年5月26日

著者
阿川弘之
金達壽
大田洋子
山代巴
島尾敏雄
ほか

發行者 野間省一

發行所 株式會社 講談社
東京都文京區音羽2-12-21
郵便番號 112
電話東京03 (945) 1111(大代表)
振替 東京 8-3930

製幀 螢江征治

印刷 大日本印刷株式會社
製本 島田製本株式會社

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします
Printed in Japan

0395-107065-2253 (1)
(文1)

現代名作選(二)　目次

巻頭寫眞

阿川弘之
年年歳歳……七

金達壽
塵芥（ごみ）……一八

大田洋子
屍の街……三〇

山代巴
機織り……四一

島尾敏雄
夢の中での日常……四七

耕治人
指紋……五七

埴谷雄高
虚空……六五

井上光晴
書かれざる一章……八〇
三浦朱門
冥府山水圖……九五
西野辰吉
米系日人……一〇三
杉浦明平
ノリソダ騒動記（第一回——第三回）……一一
長谷川四郎
張德義……一三三
小島信夫
小銃……一四四
安岡章太郎
悪い仲間……一五一
吉行淳之介
驟雨……一六四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

霜多正次
軍作業……一七六
遠藤周作
白い人……一九〇
松本清張
笛壺……二一九
有吉佐和子
地唄……三一九
石原慎太郎
處刑の部屋……二四五
小林勝
フォード・一九二七年……二七〇
木山捷平
耳學問……二八三
深澤七郎
楢山節考……二九〇

大江健三郎
死者の奢り……三四
開高健
パニック……三三
城山三郎
神武崩れ……三六
福永武彦
飛ぶ男……三八
大原富枝
鬼のくに……三九
作品解説・作家入門……小田切秀雄四〇三
年譜……四一七
参考文献……四四四

現代名作選

(二)

阿川弘之

年年歳歳

一

一ゆれすると復員列車はゆつくり動き始めた。ベルも汽笛も鳴らなかつた。日は暮れかけ、こまかい雨がガラスの窓を雫になつてつたつてゐる。微光の中に荷物と一緒に折り重なつて乘つてゐる人々の脂じみた顏が見える。車内灯はついてゐない。道雄の周りは皆、上海から一緒に歸つて來た海軍の者ばかりである。「ハシレ」「イソゲ」と急かれて、雨と汗とでべとべとになり乍ら、DDTの消毒、荷物の檢査、證明書の交付、金錢の支給、食料と煙草と外食券の配給、と眼の廻るやうな數時間であつた。博多の町がどんなに燒けてしまつたか見る暇もなかつた。列車が動き出すと、すつかりすんでしまつた——何も彼も。興奮が少し醒めて、一つの落ち着きが箱の中を流れた。人々の心に次第に、故郷の山や、日の光る畑や、川の流れが湧いて來た。妻や子供たちや父ははの面影も浮かんだ。列車は鈍い音を立ててゆつくりゆつくり進んでゐたが、又一搖れすると停つてしまつた。日はすつかり暮れた。

「これで名古屋まで行くのか。」

「いくらただで乘せても、電氣ぐらゐつけろ。」

兵士たちはどなつた。何だかどなつてみたかつた。口でいふ程不平なのではない。電氣がともらなくて焦立つやうな神經はとうにどこかで失つてゐた。雨に濡れた窓の外を何か賣聲のやうなものが近づいて來る。少し窓を上げて見ると、

「卵はいりませんか、たまご、たまご。」

風と一緒に呼び聲が入つて來た。一人通り過ぎると又一人來た。女の聲も子供の聲もある。煙草、するめ、卵、菓子。兵士たちは食料があるので、買はうとはしない。ただ珍しい。あちらでも、こちらでも窓が開いた。

「卵いくらだ。」

「五圓。」

「五圓？」

初めて聞く内地の物の値段だ。高いといふ氣持と、安いといふ感じがへんに入り交つて感じる。上海では電車賃が七十圓もした。

「たかい？　ぢやあ二圓にまけとくよ。いらない？」

女の物賣りだつた。顏は見えなかつたが聲は綺麗だつた。横に停止してゐる貨物列車との間を、小足にきざみ乍ら呼んで行く。顏を出して見てゐると、向ふから黑い影が來て、一人の物賣りの前に立ちふさがつた。制服らしいボタンが薄く光つてゐる。低い聲で二言三言何かいふと、黑い影は一つかみ何か掴んで、つと足早に消えた。列車は又ゆつくり動き出した。

「どこだらう？」

「香椎ぢやないか。」

「香椎はちがひます。どこかわからない。」

幾人か、兵士たちは暗い窓からのぞいて物賣りたちに、

「さよなら。」
「さよなら。」
と呼び掛けた。電信員や特攻隊の若い兵士たちであつた。
「さよなら。」
「さよなら、元氣でね。」
物賣りたちは遠ざかり乍ら答へた。カタンカタンと列車がポイントを割つて行く曲り道にも、一人女の物賣りが立つてゐた。
「元氣で。さよなら、勝つて歸るんなら、ばんざい、といひたいね。」
聲は流れ、籠と手は、ばんざい、の恰好をしてゐた。
ぱつ、と薄明く電灯がついた。わつ、と兵士達は歡びの聲をあげた。列車は臨港線から本線へ入つたらしく、速度が急に增して來、それにつれて電灯も明々と輝き出した。
「それつ。」
「いいぞ。」
外は闇で、車窓のガラスには兵士たちのどすぐろい笑顏が鮮かに寫つた。電灯はますます輝き、眩いばかりに水のやうに透明な光が流れた。
「おや。」
「明る過ぎる、をかしいぞ。」
誰かが言つたと思ふと、青い光が閃き、列車の中は再び闇になつた。車窓をシグナルの赤い灯がゆらりと搖れて流れた。もう二度とともりさうもなかつた。兵士たちは疲れが出て、一人、二人と眠りこけて行つた。

二

眼をつむると道雄の心に浮かび上つて來る。黃浦江を、文字通り埋めつくして二列に浮かんでゐたLSTやアメリカ艦船の長い長い列。どの艦にも高々と電探の空中線がそびえ、キャセイ・ホテルの上流からは塗具の色も新しい重巡洋艦が、青味がかつた眩い發光で、頻りと僚艦を呼んでゐた。スピイカアからは絕えず音樂が流れ、セイラアたちは白い帽子を斜にかぶつてワイヤアを卷いてゐた。岸の楊柳は芽をふきつくして、重油の光る江水に影を落してゐた。何年前だつたらう。往年の「武藏」の勇姿が浮かぶ。橫須賀の港口近く巨體を浮かべて、同じ眩い發光信號が僚艦を呼んでゐた。
吳淞を拔錨してから半日、書類の整理に疲れて、後甲板に出て見ると、いつか濁つた水は遠くなつて、一年半ぶりに見る青い波が、舷側に白く碎けて、泡立つてゐた。船は輕くピッチングをしてゐる。
「副官、見張當直のない航海は初めてです。」
一人の下士官が云つた。道雄はわけもなく涙ぐみさうになつた。
「船長にたのんで當直に立たせてやらうか。」
「冗談ぢやない。結構です。」
下士官は笑つて、ぽいと煙草を海に投げた。レエルから乘り出すと、青い波は泡に崩れ左舷のプロペラが金色に光り乍らついついと水の中を泳いでゐた。船が舵を上げるとプロペラは颯々しく空廻りしてしぶきを飛ばした。
博多に入港した夜、大尉の襟章と袖章とを脫すと道雄はそつと水に捨てた。重油の浮いた靜かな波が、白い紙に包んだ大尉の徽章を辨當殼と一緒に流して行つた。船の明りが水に落ちてそれを照らしてゐる——。
眼を明けると列車は眞暗なまま走り續けてゐる。
未だどうしても歸つて來たやうな氣がしない。もつともつと烈しく衝き上げるやうな喜びが、自分をとらへるかと思つたが、何事もない。平凡な氣持だ。無暗にいそがしかつただけだつた。廣島の父ははの事が心の影だらうか。廣島。上海の片隅の小孩でも原子爆彈の廣島は知つてゐた。眼の惡い母と、中風で半身の利かぬ父と二人の老人が、生きてゐてくれとは希めなかつた。ただ姉と甥とがもしかして助つてゐてくれれば、と思ふだけだつた。
終戰後、機會のある每に、丹念に見た寫眞も、新聞も一つ一つ心

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

を暗くするものばかりだつた、便りは勿論來なかつた。
列車は關門トンネルを越えた。いつか道雄もねむつた。
どのくらゐ睡つたか。列車の停る勢でふと目覺めると、山口縣の小さい驛だつた。時計は夜半の三時を少し廻つてゐる。向ひのフォオムの電灯の下では、驛員が積み上げられた味噌樽から餘念無く味噌を盜んでゐる。夜食でも作るのだらう。見てゐた者は笑ひ出した。笑ひ聲で人が又起きた。
「驛員さん、電氣はつかないのか。」
「銀蠅するならもつと大仕掛けにやれよ。」
驛員はこちらを見てにやりと笑ふと味噌を取り終つて、ゐなくなつた。雨がいつかやみ、濡れた窓から驛の明りが射してゐる。
列車が動き出した。道雄は物憂く又眠りに落ちて行つた。
次に醒めた時は、もう嚴島の黑い大きな影が見え、空は少し白んでゐた。呉の田舍の下士官は早く起きて身仕度をし、はしやぎ切つてゐる。
「歸ると丁度お袋の奴、何にも知らんで、裏の戸口で飯を炊いとるぢやらう。後から行つてわッと驚かしてやらにや。」
乾パンを齧り乍ら、樂しさうにしやべつてゐた。
「家のある奴は羨しいな。」道雄は言つた。
「さう悲觀したもんでもないですよ。歸つて見にやわからんよ。」
「大ていわかつてる。」
廣島が近づくにつれて、夜は明けはなれ、兵士たちは眠りからさめて、眞劍な顏で窓の外に原子爆彈の被害が近づくのを待ちかまへた。それは又初めて見る內地の町の變り果てた姿でもあるわけだつた。
「全く俺もどこに歸つていいか、途方に暮れるよ。」
愈ゝはつきりさせられる時が近づいて來た。自分がどういふ環境の中へ投げ込まれるかわからぬのが心もとないが、恐ろしいといふ感じはなかつた。父母の死を、はつきり確めて、その時どんな衝動を受けるか、當り前の事のやうに平氣でゐられさうな氣がした。

三

廿日市を過ぎ、五日市を過ぎ、列車は廣島の郊外にさしかかつてゐる。
「家は澤山あるやないですか。大丈夫や副官。」
「馬鹿、ここは未だ廣島ぢやないんだ。」
果して己斐を通過すると被害があらはになつて來た。初めしばらく家がまばらに殘り、大地震のあとのやうに傾いてゐるのが見えたが、すぐに何も無くなつた。線路の右と左には、見渡す限りの瓦礫の原が果も無く續いてゐる。全く「原子沙漠」といふ感じだつた。道雄は唾をのみ込み乍ら、食ひ入るやうに變り果てた故郷の街を見つめてゐた。
「家はどの邊ですか。」
「待て、待て。もう少しして二つ目の鐵橋を渡るとその左側だ。」
もしかして、と思ふと道雄は興奮して來た。ゆるいカアヴを畫いて列車は走つてゐる。鐵橋にかかる。
「綺麗なもんだ。」
彼は成るべく落ちつくやうにした。何もありはしなかつた。家の邊りも北の果から南の果へ同じ燒野原である。昔は汽車から見えなかつたビルディングの殘骸がぽつんぽつんと見えた。燒けただれて黑く尖つた木々の姿は不氣味だつた。同情してゐて呉れた兵士たちは默つた。
「でも麥が生えてゐる。」
誰かが言つた。ほんとにさうだつた。燒けあとに麥がよく伸びてゐた。それは何か心を明るくした。
「とにかく降りる仕度をしよう。」
彼はどしんと席に腰を下ろした。窓から出なければとても出られない。列車は驛に入つた。

「ひろしま――ひろしま――のりかへ――長い間、皆樣――祖國の――一層の――再建のため」
喧騒の中をスピイカアの聲がとぎれとぎれに入つた。
「ぢやあ、隊長、若田、平谷、おう海老原。さよなら。元氣で、さよなら。」
別れはいやであつた。彼はうしろを見ず、走るやうに階段を降りてしまつた。
「加川大尉、もし困つたらうちへ來なさい。矢野の驛で下りて聞きや、すぐわかる。」
呉の下士官だつた。
「ありがたう、ほんとに厄介になりに行くかもわからない。」
その下士官とも別れた。

四

驛前に巡査の派出所があつた。それを見ると急に道雄はたよる氣持が強くなつた。
「あの、復員者ですが、家の者がですね、もし生きてるか死んでどうなつたか確かめるとしたら――市役所へ行くとすると、市役所は今どこにありますか。」
巡査は興味がなささうだつた。
「もとの所にあります。」
「あの――白島のK町の邊りは勿論無いでせうな。」
今見て來た事を聞いた。我乍らつまらない氣がした。
「さうですな、無論ないですよ。」
歩き出すよりほかなかつた。これと言つて行く先も浮かばず、自然に家の燒あとの方へ足が向つた。トランクを背負ひ、手提鞄を持ち、歩くとすぐ汗ばんで來る。早くは歩けなかつた。道は、これが昔通つたあの道かと迷ふ程樣子が變つてゐた。所々バラックが立つてゐる。「大衆食堂」「甘い甘いぜんざい、五圓」「代用うどん、五圓」などとしてある。空地には、此處かしこに麥が植ゑてある。近近と彼は沁み入るやうな氣持でそれを見て歩いた。朝の露に濡れて心地よい綠であつた。空はよく晴れてゐた。立木が炭になつて、によつき、によつきと殘つてゐる。それは手を硬ばらせて燒け死んだ人の死骸に似てゐると思つた。
朝早く、勤めに出るらしい人に時折行きちがつた。どの人も云ひ合はせたやうに、磨いてない破れた靴をはき、肩から雜囊をさげてゐる。道雄の姿を一通りぢろりと眺め下ろしてすれ違つて行つた。向ふから二十七八の女がリュクサックを背負つてやつて來る。髮を短く切つて、汚れた洋服を着てゐた。彼はその女にどうも見憶えがあるやうな氣がした。女もこちらを見てゐた。行き逢ひかけて二人とも立ちどまつた。思ひ出したのだ。小學校の同級生だつた。
「まあ、加川さん。どうなさつて、今、どちらから。」
彼の方は名前をはつきり思ひ出せなかつた。
「中支から復員して來ました。あの、もしか家の者の事御存知ないでせうか。」
「あら、いいぇ。いつかお姉さんにお眼にかかつた事があります。お元氣でした。えぇ、怪我もちつとも。」
ああ、姉だけは確かに助かつてゐて呉れた。彼は嬉しくなつた。
「兩親は死にましたか。」
「さあ御兩親は――あの、お母さん、お母さん。」
少しうしろからその人の母親がこちらへ歩いて來る。見憶えがあつた。彼は更めて小學校友達を見た。未だ嫁いでないらしい。伸びるものが伸びそこなつたやうに妙にふけて見えた。
「お母さん、加川さんよ。中支から歸つていらしたんですつて。ねえ、加川さんの御兩親はどうなさつたかしら。」
「死んだんでせう。違ひますか。」
彼は死んだら死んだと早くはつきりさせて欲しかつた。
「まあ、まあさう。おめでたうございます。どんなに御苦勞なさつ

たでせう。まあ何を仰言いますか、お二人とも中々お元氣でゐらつしやいますよ。先日も、もうだいぶ前ですが、お米の配給所でお母様にお眼にかかりました。」
「え？　本當ですか、本當に生きてるんですか。」
「本當ですとも。ほんとに本當ですよ。今ね、牛田のたしかA町にゐらつしやいますよ。もとのお邸の下には谷さんがバラックを建てて住んでゐらつしやいますから、あすこへ寄つて、よく聞いてお歸りなさいませ。」
「なんだ、生きてたんですか。」
　彼はずるい事をした時のやうににやにや笑ひ出した。何と禮を言つていいかわからなかつた。
「ぢやあお氣をつけていらつしやい。どんなにお母さんがお喜びになるやら。」
　さう言はれて別れた。にやにや笑ひはどうにもとまらなかつた。
　敎へられた谷といふ親戚の家へ行つて見ると、そこではおぢいさんと主人とが即死し、女子供だけが殘つて、バラックに住んでゐた。色々話を聞いた。姉も甥も確かに無事だつた。滿洲にゐた兄も、終戰の一個月前北平に轉勤してゐた。彼は何かに惠まれてゐるやうな氣がした。子供が荷車に荷物をのせて家まで案内してやるといふ。彼は感謝し乍ら、子供に荷物をまかせた。子供と一緒に土手の道へ上る。家のあつた跡には、石燈籠が二つ、洗面所がぽつんと一つ殘つてゐる外、すべてがらがらの原つぱだつた。石燈籠が立つてゐるのは妙な氣がした。ガラス瓶が飴のやうに延びて、くつついてころがつてゐた。川を渡す橋はへの字型に歪んでゐる。然し川の水は矢張よく澄んで流れてゐた。
「小母ちやんの所へは時々遊びに行くの。」
「ううん。」と子供はかぶりを振り、「小母ちやんは目が惡うて不自由なんぢやけん、お母ちやんがあんまり行つたらいけんいうてんぢや。」
「坊や、荷物は僕が押して行くから、一寸先へ走つて行つて小母ちやんに報らせてくれんか。」
　子供は素直に頷くと、走り出した。少し走つて立ちどまり、振りかへつて彼に道を敎へた。そして又走つて行つた。

五

「まあまあ、まあ、坊やが來て何をいふやらと思うたら、あんた歸つて來たのか、ほんとに歸つて來たのか。」
　母はめがねをはづし乍ら出て來た。
「さあおあがり、靴をはよぬいで、さあ。」
「よく生きてゐて。私はとてもお母さん、生きてるなんて。」
「さうやろうとも、さあ。」
　言つたまま顏をそむけて泣いてゐた。
　障子がひらいて、父がこたつに向ふむきにあたつてゐた。
「お父さん歸りました、よく生きてて下さいました。」
　父は不自由さうに身體を道雄の方へねぢむけると、ぢつと見てゐたが、何も言はず、
「おう、おう。」
　と、入齒のない奇妙な口元をぽかんとあけ、うめくやうな聲を出すと、「う、う、う。」と啜り泣きだした。二階から甥の浩がとぶやうに降りて來た。
「おかへり、道兄さん。僕もう歸つて來ると思つた。いつも驛に行つて復員者らしい人つかまへて樣子さぐつてた。だけどおぢいさん、おばあさん生きてたなんて不思議でせう。」
　道雄は父母が泣いてゐるので、眼のやり場がなく、浩に「うん、うん。」と頷いて間の拔けた返事をした。母は涙をふきふき、
「初めは大丈夫と思うてたけど、まる半歳になつても便りはなし、こつちから出した手紙は戻つて來るし、ひよつとしたらどこどで死んでしまうたかと思うて……」

「お母さんは、ああいうて心配ばかりするが、俺は自信があつた。新聞をみても、もう大方歸る頃とは思うてをつた。」

ふるへる手の甲で涙をふき乍ら父も言つた。齒がないため、息が拔け、ひどく老い込んだ感じだつた。

「そんな、私の事は、わたしはずつと元氣だつたんです。然しこの七ケ月の間、お父さんお母さんは亡くなつたものと、すつかり思ひきめてゐたのに。廣島で降りようか、山口の家の墓へ行かうか、まつすぐ一度東京へ出てから、骨をさがしに歸らうか、と迷つたりしました。どういふ譯で生きてゐられたの、夢のやうといふが、ほんとに夢みたいで……」

父はまた、「う、う、う。」と子供のやうに聲をあげた。母は前掛を顏に押しあてて泣いた。浩だけが元氣さうに、

「僕、丹前を出してあげる。」

と押入から行李をひきずり出したが、一寸手を休めて考へてゐると思ふと、急に顏が硬ばり、「わつ。」と行李の上に俯せつてしまつた。

「何だい、何だい。」

と言ひ乍ら道雄も泣けて來た。

「よせよ、もういいよ。」

と肩に手をかけると、つとはづして、走つて緣に出た。箒を取つて掃く眞似をしながらぼろぼろ泣いてゐた。道雄は、あまりいふといけないと思ひ、障子を開けひろげて緣に出た。緣先にも小さい庭に麥とそら豆が氣持よく延びてゐた。

「七十年住めないなんて嘘なんだね。麥がよく出來てるぢやありませんか。」

父はそれで氣持が晴れたらしく、

「おう、お前も少し草取りでもしてくれ。手入が行屆かんから、あまり伸びとらんぢやらう。」

さう言つて麥生を見た。不自由なからだになつてからも、すきな畠作りが忘れられず、小言を言ひいひ浩や母に作つてもらつて樂しんでゐるやうだつた。母もどうやら落ちついた。

「さあとにかく朝御飯にしませう、今お味噌煮たちます。」

「君はどうしてる。」

「廣島の高等學校、大竹に今あるんだけどね、受けるけど、自信ないよ。隣りのラヂオが煩くて勉强出來ないよ、カム、カムエヴリボディなんて、馬鹿な歌。道兄さん何で歸つた、ＬＳＴ？　海軍の船かい。」

「歸つたのか、リバティだよ。母さんどうしてる、今。」

聞くと義兄が華北から早く引揚げ、一緒に東京にゐるのだつた。

心配事は一時間ばかりの間に一つ一つみんな煙のやうに消えていつた。谷の子供はいつの間にか歸つてしまつてゐた。

「何もかも。こんな運のいい家族は廣島にはゐませんよ。」

朝飯の膳に坐り、味噌汁の湯氣が上るのをたのしく見乍ら彼は云つた。

「さうとも、さうとも。家も着物も燒けた事、わたしらもうとうに、何とも思うてへん。皆さんのおかげで食べる物もどうやらあるし、あんたが歸つてくれたし、何もいふことない。毎日佛さんに祈つてました。」

「お母さんはの、すぐああ簡單にいふが、新圓ちふもの知るまいが、預金は封鎖されて、賣る物もなし、呑氣な事を考へとるとお前も困るよ。」

「知つてますよ。新圓で千圓もらつたんだもの。」

道雄は笑つた。何十日ぶりかの味噌汁も、新鮮な漬物も實にうまかつた。彼は香りの高い茶を何杯も飲んだ。

「道兄さん、終戰後苦力した？　なぐられた？　どんな物食べてたの。」

浩は自分の興味のある事を頻りにきいた。

「このトランク向ふで買つたの。」

「ああ、赴任した頃買つたんだ。今開けよう。何や彼や少しあるんだ。」
　これが、上海米、これが罐詰、石鹸、キャンディの袋、シャツと一緒に一つ一つ引き出した。
「一袋二千圓の飴、馬鹿みたいだらう。でもみんな無事だとわかつてたら、無理してもつと買つて來るんだつた。僕には誰に食べさすあてもなかつたものね。」
「まあ二千圓の飴。一つよばれよか。」
「どれどれ。」
　父も手を出した。浩が金色の紙をむいて口に入れてやると、齒のないあごであぐあぐと嚙んだ。
「一つ殘らず、みんな食べて下さいよ。何にもいらないよ。上海の物價はね、何しろ電車賃が、七十圓、儲備券でいふと一萬四千圓。」
「をかしくなつてしまふね。」
　浩も母も笑つた。
「お前、何か食べたいものあつたらいうとおくれや。晩には小豆が一二合ある、赤い御飯でも炊きませうか。」
「有がたいな。何でも嬉しくて美味しいけど、さうだな、牡蠣とか鮎とか、鹽辛とか、むやみにそんなものが食ひたいけど。」
「鮎はあんた無理だよ。牡蠣なら驛前の闇市で賣つてるやろ、一休みしたら買うて來るか。」
「東京へ電報も打つといい。僕も一緒に行く。」
　浩が言つた。
「よし買ひに行かう。じやんじやか買つて來て、がぼがぼ食べちやはう。」
「おいおい、一時の手當を貰つたからというて、調子に乘ると、あとで後悔するぞ。昔のやうにはいかんぞ。」
　父の得意の小言が始つた、と道雄は思つた。いやな氣はしなかつた。母が食器片づけに手を伸ばすと、ふとみにくい火傷のただれが眼についた。
「お母さん、その傷は？」
「ああ、この傷？」
　母は爆擊の朝、窓に向つて新聞を見てゐた。不意に青い、眼のくらむやうな光が閃いたと思ふと、途方もない風が來て、家は傾き、からだは投げ出されて、眼鏡がどこかへ飛んだ。
「お父さんお父さん。」と呼ぶと、どこかから、「おいおい俺は此處にをる、此處にをる。」といふ聲がした。見ると右の肩から袖へ着物がちろちろと火を吐いてゐる。急いで着物を破り捨てた。
「その時これ丈、やけどしました。長いこと膿んで臭かつた。」
　と母は話した。
　べとべとのシャツを替へ、軍服を背廣に着替へると道雄は浩と二人、籠をさげて、家を出た。昨夜の雨はすつかりあがつて、先程通つた道には四月の明るい日が降つてゐた。むしやうに晴々とした氣持であつた。下水の水は小川へ落ちてろんろんと音を立ててゐる。

　「無敵の縺羅　勝利のつばさ
　　波をおさへて　ゆるぎは」

「兄さん兄さん、そんな歌今頃唱ふと、なぐられるよ。」
　浩が笑ひ出した。彼も笑つた。道々浩の話を聞くと、友だちや親戚や、恩師や、亡くなつた人は指に餘つた。
「嫁さんもらふかな、一つ。」
「母さん（道雄の姉）もそれがとても樂しみなんだつて。妹が一人出來るわけだし、僕にも、とても若い叔母さんが出來るわけでせう。」
「姉さんそんなこと言つてたか。」
「あのね、道兄さんが可愛いいお嫁さんもらふことばかり考へて暮してるさうだよ。然し、にくらしいのを貰つたらうんといぢめるさうだよ。」
「馬鹿いふな。」

又二人は笑つた。郵便局で二三本電報を打ち、市場で、牡蠣と海鼠と、牛肉とねぎとを買つて電車に乘つた。バラックも未だちらほらとしか見えない町を、電車は滿員で走つてゐた。

「なうなう、そこのおどうさん（おかみさんの意）、切符はどうしましたか。拂うて降りてつかあさいよ。お粥を食うてやつとるんぢやけんなう。」

運轉手がしやべつてゐるのを聞いても矢張彼は樂しかつた。

六

廣島に一週間過ごした。その間に、浩と二人宇品の海へ汐干狩に行つて、蛤やあさりを二升も拾つて來て母を喜ばせたり、疲れもなほり、氣持もおちついた。軍隊の生活が、時には遠い昔のやうにも思はれた。彼はそろそろ東京へ出ようと思つた。それをいふと母は少しがつかりしたやうで、

「復員切符は未だしばらく使へるねんやろ。」と言つたが、とめはしなかつた。浩は入學試驗が近づいた。ある日、谷の家に挨拶旁ゝよると、

「道ちやん、もう少しゐて親孝行してあげなさいよ。」

「うん、それもさうだけど、就職のこともありますし。」

道雄は生返事をした。急行券を買ひにゆく途中だつた。

「せめてお母さんを一度どこかへ遊びに連れて行つてあげなさいよ。小父さんがあのお身體だから、中々おもてへ出なさることもないのよ。」

これには一寸虚をつかれた感じだつた。さういへば母はきつと永い間燒跡さへ歩いたことはなかつたらう。自身の眼も不自由だし、父が片時も一人でほつとけない身體だし、彼は急に母が可哀さうになつた。急行券を手に入れて歸つて來ると、母に、

「あさつて發つことに決めたよ。」

と言つた。

「さうか、もう少しゆつくりしてゆくとええけど、あんたの都合もあるでせう。東京は食糧難やさうやけど。」

と母は云つた。父も浩も彼が發つことを喜ばなかつたが、とめはしなかつた。

「お母さん、明日ね、こんな天氣だつたら、どうです、花見につれて行つてあげようか。」

「そりやよからう。是非つれて行つてあげなさい、お母さんも長い苦勞だ。水いらずで辨當でも食べて來なさい。」

父が横から言つた。

「はあはあ、お花見か。今じぶんお花見でもあるまいけど、そんなら連れて行つてもらほかなあ。」

「浩に半日ばかりお父さんのこと頼んでおけば出れるでせう。」

「僕何でもするよ、安心して行つていらつしやい。」

「俺の事は心配いらん。自分でやる。心配はいらん。」

自分でやれるわけはなかつたが父は言つた。

夜、道雄は角の下駄屋から玉子を四つわけてもらつて來て、そつと戸棚へ入れておいた。並んで床に入ると浩が言つた。

「いいな、おばあさんと道兄さんのお花見なんてほんとにいいな。」

「なんだ、羨しいのか。」

「ううん、さうぢやないよ。」

「てれくさいぜ、馬鹿。」

父がふすまの向ふから言つた。

「何がてれくさいか。心ある人が見たら感心してくれる。」

「浩にえらいわるいなあ。」

母の聲だ。

「まあいいさ、そのうち小遣でもたくさん貰つて宮島へでも行つてこいよ。」

「さうだね、パスしたらね。」

そのうちみな寢入つた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com